

2. 生ワクチンの飲水投与方法の実態調査

(株)微生物化学研究所

○兼重貴裕、函城悦司

生ワクチンの飲水投与方法は、鶏特有の投与方法であり、主に若齢期の生ワクチン投与時に利用されている。近年、鶏舎設備等が大規模化、近代化する中で、最近の養鶏場における生ワクチンの飲水投与方法の実態を調査した報告はない。また、現場では飲水投与の失敗が原因でワクチンがテイクしなかったと思われる事例も見受けられる。そこで、平成27年12月～平成28年6月にかけて、採卵鶏55農場（18道県）、ブロイラー303農場（7県）を対象に、飲水投与方法（断水時間、投与時間、溶解方法、飲用水の種類、消毒の有無、飲水投与時の添加物、投与器具、工夫点）について聞き取りによる調査を実施した。

調査の結果、採卵鶏農場の52%が飲水投与の際、自動投薬配合器を用いて給水ラインにワクチン液を添加していた。ブロイラーについては薬液用タンクにワクチンを溶解する方法が主流であった。また、ワクチン投与時の添加物について、従来から推奨されているスキムミルクの使用は採卵鶏農場の24%、ブロイラー農場の27%にとどまった。スキムミルクの利用を避ける理由として、スキムミルクがニップルや配管のつまりや汚れ（バイオフィルムの形成など）につながるものが原因の一つとしてあげられた。ニップルを利用した飲水投与は採卵鶏、ブロイラー農場それぞれ86%、76%であった。